

Title	単身赴任家族の危機適応過程：「赴任期間」と「妻の価値観」に着目して
Sub Title	Understanding family stress and coping under job-induced separation (tanshin-funin) : family stress and coping as a function of the length of separation and wives' value commitment to their spouses' work involvement and to the maintenance of householding
Author	南, 隆男(Minami, Takao) 浦, 光博(Ura, Mitsuhiro) 稲葉, 昭英(Inaba, Akihide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.86 (1988. 6) ,p.199- 227
JaLC DOI	
Abstract	<p>以上に述べてきた結果ならびに考察は,大略つぎの5点にまとめることができよう。(1)夫の単身赴任による家族システムの変化に対する適応の程度は,妻の価値観と高い関連を持つ。(2)特に家族適応に対する妻の評価は,夫の赴任期間がどの程度であるかに関わらず,妻個人の価値観によって大きく規定される。(3)妻個人の適応状態は本人の価値観とともに夫の赴任期間とも高い関連をもつ。夫の赴任期間の長い群の方が,短い群あるいは中程度の群よりも個人適応の程度が高くなっている。(4)夫の赴任期間が長い群で個人適応の程度が高くなるのは,妻のとった対処戦略が効果を及ぼしたと同時に,夫の帰宅日数が増加したことによって妻の負担が低減されていたことにもよる。(5)妻の価値観,適応状態と対処戦略の関係は一義的に決まるものではない。まず価値観が対処戦略を規定し,ついでその対処戦略が適応状態を規定するという関係性と,価値観が適応状態を規定し,つぎに適応状態が対処戦略を規定するという関係性の2つを想定することができる。以上の結果と考察は,遡及的な方法を用いて得られた調査データのうち,限られた変数間の関連のみを分析することによって導き出されたものである。したがってあくまでも仮説の域を出るものではない。今後,次のような諸変数を分析していくことによって,単身赴任家族の危機適応過程をより明確に理解することができよう。まず,問題のところで触れたように,状況的変数として家族システムの特性と社会的環境の特性とを分析する必要がある。今回の分析では,妻の個体的特性として価値観の効果を検討した。そして,適応状態や対処戦略に対してその価値観がきわめて大きな影響を及ぼすことが示唆され,その影響のメカニズムについてはかなり複雑な因果関係が想定された。この妻の個体的特性である価値観の効果に加えて,家族システムの特性と社会的環境の特性の効果を検討することによって,個体(妻個人)-集団(家族)-社会の3つのシステムがいかに関連し合いながら家族や妻個人の適応を規定するのかをより明解な形で理解することができよう。また,人口統計学的な変数と適応過程との関連についても検討する必要がある。今回の分析結果からは,適応過程についての心理的な過程をある程度理解することは可能であるが,ここで得た知見を実際の単身赴任家族の危機適応に応用するためには,心理的過程と人口統計学的な変数との対応関係を明確にしておく必要がある。さらに,単身赴任の状況そのものについてもより精しく検討する必要がある。今回の分析では,家族の危機適応過程として「単身赴任→対処戦略→適応」という過程を想定し,この過程に介在する諸変数の効果を検討した。しかし,夫の単身赴任が直ちに何らかの対処を必要とするほどの危機的状況をもたらすとはかぎらない。むしろ,夫の単身赴任によって家族システムが変化し,その状況において他の何らかの出来事が生じた場合にはじめて家族にとっての危機的状況が生じ,それに適応するための対処戦略がとられるものと考えらるべきであろう(稲葉ほか,1986)。したがって,対処戦略の効果を正確に理解するためには,夫の赴任期間中にいかなる出来事が生じ,それに対してどのような対処戦略がとられることによっていかなる効果が生じたのかというより具体的な過程を分析することが必要である。今回の調査で得たデータからは以上のような分析が可能であろう。しかし,それでも遡及的な方法を用いたことによる限界は克服されない。したがって,厳密な意味での因果関係については明確な結論を出すことはできない。また,単身赴任をしている夫の側の心理的過程や行動について明らかにならないかぎり,単身赴任家族の危機適応の全体的過程を理解することはできない。今後は,因果関係を正確にとらえることができ,また夫の側の心理的過程や行動も同時に分析することができるような方法を用いることによって,単身赴任家族の危機適応についての力動的かつ全体的な過程を明らかにしていく必要がある。</p> <p>The Japanese word TANSHIN-FUNIN denotes such the situation that husband is apart from family and lives in, say, "Kyoto" where the current working branch for him in a company locates while his spouse and children live in "Tokyo" where the whole family have resided together until the company's transferring him to the "Kyoto" branch followed by the family's decision to live apart for some practical reasons. Using a sample of wives (N=150) from TANSHIN-FUNIN families within a large industrial organization in Japan, this study explored social-psychological processes whereby stress was accumulated in family and behavioral strategies that wives tried to cope with the stress accumulated.</p>

Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000086-0199">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000086-0199</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 単身赴任家族の危機適応過程

—「赴任期間」と「妻の価値観」に着目して—<sup>1)2)</sup>

南 隆男<sup>3)</sup>・浦 光博<sup>4)</sup>・稲葉昭英<sup>5)</sup>

## Understanding Family Stress and Coping under Job-induced Separation (*Tanshin-Funin*)

—Family Stress and Coping as a Function of the Length  
of Separation and Wives' Value Commitment to  
Their Spouses' Work Involvement and to  
the Maintenance of Householding—

*Takao Minami, Mitsuhiro Ura, and Akihide Inaba*

The Japanese word *TANSHIN-FUNIN* denotes such the situation that husband is apart from family and lives in, say, "Kyoto" where the current working branch for him in a company locates while his spouse and children live in "Tokyo" where the whole family have resided together until the company's transferring him to the "Kyoto" branch followed by the family's decision to live apart for some practical reasons. Using a sample of wives ( $N=150$ ) from *TANSHIN-FUNIN* families within a large industrial organization in Japan, this study explored social-psychological processes whereby stress was accumulated in family and behavioral strategies that wives tried to cope with the stress accumulated.

- 1) 本研究は、慶應義塾学事振興資金（昭和 61 年および 62 年度）の援助による『現代人の移行 (socio-cultural and psycho-developmental transitions) をめぐる総合的研究』（研究代表者：南 隆男）の一環である。
- 2) 本研究の一部は、産業・組織心理学会第 3 回大会（1987 年）において発表された。
- 3) 慶應義塾大学文学部助教授/同大学産業研究所研究員（組織心理学・社会心理学）。
- 4) 関西大学社会学部講師（社会心理学）。
- 5) 東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程（社会学）。

本論文では、夫（父親）の単身赴任によって生じた家族システムの変化に対して、家族（員）がいかに適応するのかを検討した研究の結果（の1部）を報告する。

## 研究の背景

単身赴任とは、一人の人間が会社システムでの地位・役割と、家族システムにおける地位・役割とを共有することで生起する出来事だと考えてよい。したがって、単身赴任に対するアプローチにも、①赴任者本人の孤独・健康・ストレスといったことがらを分析の主要な焦点としたもの、②会社（企業システム）の単身赴任に対する労働政策的な把握をめざしたもの、③単身赴任にともなう家族システムの変化や適応の過程を研究対象としたもの、の3つを想定することができる（稲葉ほか、1986；南ほか、1986）。

単身赴任をめぐるこれら3つの領域における研究は相互に独立しては成立しえない。赴任者本人の健康やストレスが家族システムのありようによって大きく規定されることは言うまでもなく、その逆の関係を想定することもまたきわめて容易である。そしてこれら2つのシステムのそれぞれが会社システムのありようと強く関連することもまた論を待たない。つまり、単身赴任に何らかの問題があるという前提に立ち、その解決策を探ろうとするならば、これら3つのシステムそれぞれにおける問題がいかなるものであるのかを明らかにする必要がある。そしてその上で、システム間の関連性を総合的に把握することによってしか、本質的な問題解決は不可能であると言わなければならない。にもかかわらず、従来の単身赴任研究のほとんどは、①、②の視点にもとづくものであった。③の問題については、いくつかの研究がようやく着手し始めてはいるが、体系的な蓄積が最も遅れているのはこの領域だと言わなければならない。

そこで、われわれはこの第3の領域、すなわち「残された家族（員）」にとっての「単身赴任」を研究対象として、次に述べる問題提起にもとづき、調査・分析を行なった。

## 問 題

「残された家族（員）」の側から単身赴任という出来事を見るとき、それは、通常、夫（父親）が家を離れることによって生じる家族システムの変化と捉えることができる。この変化への適応過程を、とりあえず、残された家族員の1人である妻の視点を通して把握するために、われわれは次の2つの問題に答えることから出発する。

- (1) 夫の単身赴任によって生じた家族システムの変化に対して、妻個人はいかにして適応しようとするのか。
- (2) 夫の単身赴任によって生じた家族システムの変化に対して、妻はいかにして家族そのものを適応させようとするのか。

これらの2つの問題に答えるためには、少なくとも独立数として3種類、従属変数として2種類の変数を扱う必要がある。

3種類の独立変数とは、①単身赴任そのものに関する変数、②妻個人の個体的変数、そして③状況的諸変数、の3つである。単身赴任という出来事によって家族システムが変化し、その変化が妻個人や家族の適応状態を規定すると考えるならば、単身赴任そのものの特性と、妻個人あるいは家族そのものの適応過程との関連性を明らかにする必要がある（稲葉ほか、1986；南・稲葉・浦、1987；浦・稲葉・南、1987）。

今回の分析では、適応過程の推移を理解するという目的から、夫の単身赴任以後どれくらいの期間が経過しているのかを単身赴任そのものに関連する要因として扱う。

また最初に述べたように、単身赴任が家族システム、会社システムという2つのシステム間の関連から生じる出来事である以上、それぞれのシステムに対して妻がいかなる価値観を抱いているかが、単身赴任にともなう家族適応過程になんらかの影響を及ぼすものと考えてみることは自然である。そこで本研究では、妻の、会社に対する価値観と家族に対する価値観を、それぞれ会社へのコミットメント、家族へのコミットメントという2つの変数として捉え、それらの効果を検討することとした。

第3の状況的諸変数としては、大まかに2つのものを想定することができる。1つは家族のシステムとしての特性であり、もう1つは家族をかこむ社会的環境の特性である。この2種類の状況的変数を、単身赴任以前とそれ以後という時間的な視点を加えて考慮すると、結局4種類の状況的変数を検討する必要があることが明らかとなる。これら状況的諸変数が家族の適応過程に大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。しかし、その精しい検討は次回以降の報告に譲ることとして、本報告では、単身赴任家族の危機適応過程の分析の端緒として、「夫の単身赴任期間」と「妻の、会社および家族に対する価値観」という2種類の変数のみの効果を扱う。

そして、2種類の従属変数とは、①現在の適応状態と②その適応状態に至るまでに妻のとってきた対処戦略、2のつである。現在の適応状態についてはさらに、家族システム全体としての適応状態と、妻個人の適応状態の2つに区別することができる。

以上の諸変数間の関連について、次に述べる方法によって検討を加えた。

## 方 法

### 1. 被調査者

大手鉄鋼メーカー（1社）の1986年8月時点における単身赴任者の妻

314 名に対して質問紙を送付した。このうち利用可能なデータは 267 票、有効回収率は 86.0% であった。

## 2. サンプルのスクリーニング

分析の精度を高めるため、有効票 267 のうち夫の単身赴任が初回のもので、家族形態が妻と子供のみが同居しているサンプルのみを対象とした。結局、利用したサンプルは 150 である。

## 3. 独立変数

3-1. 単身赴任期間：夫の単身赴任以後どれくらい期間が経過したかにもとづいて、被調査者数を 3 群に分けた。最も期間の短い (1~8 カ月) 群 (L 群) の被調査者数は 53 名、中程度の期間 (9~24 カ月) の群 (M 群) は 49 名、最も期間の長い (25~67 カ月) 群 (H 群) は 48 名である。

3-2. 妻の価値観 / 会社へのコミットメント：被調査者である妻が (夫の勤務する) 会社や単身赴任に対してどの程度価値をおいているかについて、4 項目からなる質問 (表 1) で「そうは思わない」(1 点) から「そう思う」(4 点) までの 4 段階尺度上に評定を求め、その合計得点を会社へのコミットメントの程度とした。合計得点が 11 点以下の群 (L 群) と 12 点以上の群 (H 群) に被調査者を 2 分した。L 群は 76 名、H 群は 74 名であった。

3-3. 妻の価値観 / 家族へのコミットメント：上と同じ手続きで、やはり 4 項目からなる質問 (表 1) を用いて、妻の、家族へのコミットメントの程度を求めた。合計得点が 11 点以下の群 (L 群) と 12 点以上の群 (H 群) に被調査者を 2 分した。L 群は 64 名、H 群は 86 名であった。

3-4. 要因配置：赴任期間 (L・M・H) × 会社へのコミットメント (L・H)、赴任期間 (L・M・H) × 家族へのコミットメント (L・H) という 2 種類の要因配置で一般線形モデル (GLM) によって分析を行なった\*。各条件の

\* 本研究におけるデータ解析は、SAS のプログラムを用い、慶應義塾大学計算センターの FACOM-M360、ならびに関西大学情報処理センターの FACOM-M380 F によって行われた。データ解析にあたっては、関西大学社会学部廣田君美教授の支援を受けた。記して謝意を表します。

被調査者数を表2に示す。

表1 「妻の価値観」尺度

次のような意見があります。あなたはどう思われますか。あなたご自身のお気持ちに最も近いものに、○印をつけてください。

● I 会社・単身赴任へのコミットメント

- 1 (1) 夫の単身赴任は、会社の都合だから仕方ないと思う
- 2 (3) 会社が成りたっていくためには、やはり単身赴任という制度も必要なのだと思う
- 3 (5) 仕事をもっている人が家族を多少犠牲にするのは、やむをえないと思う
- 4 (7) 男は、やはり仕事を第一に考えるべきだと思う

● II 家族へのコミットメント

- 5 (2) 家族はできればいつも一緒にいて、よろこびも悲しみもわかちあうべきだと思う
- 6 (4) 夫である以上、会社のことよりも本当は家族のことを第一に考えるべきだと思う
- 7 (6) 父親がいつもいない、ということは、家族の本来のあり方に反していると思う
- 8 (8) 家族のために昇進をあきらめたり、転職を考えることがあってもよいと思う

(註) 回答は、そうは思わない/どちらかといえばそうは思わない/どちらかといえばそう思う/そう思う、の4件法による。( )内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

表2 各条件ごとの被調査者数

単身赴任期間	コミットメント			
	会社		家族	
	L	H	L	H
L (1～8ヶ月)	33	20	18	35
M (9～24ヶ月)	25	24	22	27
H (25～67ヶ月)	18	30	24	24

## 4. 従属変数

4-1. 家族適応：夫の単身赴任にともなう家族システムの変化に家族がどの程度適応していると妻が評価するかについて，18項目からなる質問(表

表 3 「家族適応」尺度

以下のことがらは，現在あなたのご家族ではどんな感じですか．この 1~2 か月以内のようすについてお答えください。

## ● I 家 計

- 1 (1) 家計のやりくり，は
- 2 (7) 将来にむけての貯蓄計画，は
- 3 (17) 買いたい物品の購入（教育や娯楽などへの支出も含む），は

## ● II 家 事

- 4 (2) 食事のしたくやあとかたづけ，は
- 5 (8) うちの中のそうじ・かたづけ，は
- 6 (15) 洗たく・アイロンがけなど，は

## ● III 子供の養育・社会化

- 7 (3) 子供のしつけや世話，は
- 8 (9) 子供の教育への目くばり・勉強の相手，は
- 9 (13) 子供の気持をくみとること，は

## ● IV 老親の扶養・病人の介護

- 10 (4) ご主人の親の世話，は
- 11 (10) あなたご自身の親の世話，は
- 12 (14) 病気をした（している）家族の人の世話，は

## ● V 渉 外

- 13 (5) 親せきとのつきあい，は
- 14 (11) 近所の人たちとのつきあい，は
- 15 (18) 家族ぐるみでつきあっていた友人・知人とのつきあい，は

## ● VI 緊張処理・統合

- 16 (6) 家族でのレクリエーションや娯楽，は
- 17 (12) 家族の人のあいだの気持ちの通じ合い，は
- 18 (16) 家族の人どうしの必要な相談や話し合い，は

(註) 回答は，うまくいっていない/あまりうまくいっていない/まあうまくいっている/うまくいっている/かなりうまくいっている，の5件法による。( )内の数字は，実際の調査票上での配列順序を示す。

3) によって「うまくいっていない」(1点)から「かなりうまくいっている」(5点)までの5段階尺度上に評定を求めた。これら18項目は3項目ずつ6つの下位カテゴリーに分類される。それら下位カテゴリーはそれぞれ、①家計、②家事、③子どもの養育・社会化、④老親の扶養・病人の介護、⑤渉外、⑥緊張処理・統合、の6種類の領域における家族の適応の程度を測定するためのものである。これら6つのうち、④「老親の扶養・病人の介護」は今回のサンプルの同居形態から考えると不適切であるため、これらについての3項目は分析から除外した。残り15項目の合計得点を家族の全体的な適応状態を示す変数(以下「家族適応—総合」と略記)として扱い、5つの下位カテゴリーそれぞれについても3項目ごとの合計得点をそれぞれの領域における家族の適応の程度を示す変数として扱った。

4-2. 個人適応: 夫の単身赴任にともなう家族システムの変化に妻個人がどの程度適応しているのかについて、15項目からなる質問(表4)で「ほとんどない」(1点)から「多い」(5点)までの5段階尺度上の評定を求めた。これら15項目は5項目ずつ3つの下位カテゴリーに分類される。それから下位カテゴリーはそれぞれ、①一般的欲求充足、②関係的役割による欲求充足、③役割行動の制約・負担、という3種類の領域における個人の適応の程度を測定するためのものである。15項目全ての合計得点を妻個人の全体的な適応状態を示す変数(以下「個人適応—総合」と略記)として扱い、3つの下位カテゴリーそれぞれについても5項目ごとの合計得点をそれぞれの領域における妻個人の適応の程度を示す変数として扱った。なお、この個人適応については得点が低いほど適応状態が良好であることを示している。

4-3. 対処戦略: 被調査者の用いてきた対処戦略について、36項目の質問で「そんなことはしていない(しなかった)」(1点)から「常にそうしている(そうした)」(5点)までの5段階尺度上に評定を求めた。36項目すべての合計得点を対処戦略全体の頻度として用いるとともに、36項目のう

表 4 「個人適応」尺度

ご主人の今回の単身赴任によって、あなたご自身の毎日の生活もいろいろな点で変化したことと思います。ここでは、ご家族のようすではなく、あなたご自身のことについてうかがいます。ここ 1~2 か月のあいだ、以下のことがらはどのような感じですか。あてはまるものの番号に○印をしてください。

● I 一般的欲求充足

- 1 (1) うちにおいても、さびしさを感じる
- 2 (4) うちの中でくつろげない
- 3 (5) 防犯（戸じまりなど）や防災（地震など）に不安を感じる
- 4 (10) うちの中に、話し相手がいなく感じる
- 5 (13) うちにいる時イライラすること

● II 関係的役割による欲求充足

- 6 (2) 何かあったとき、家族の中には相談する相手がいなく、と思う
- 7 (7) 性生活に不満が残ること
- 8 (8) 子供が自分の思うとおりにしてくれない、と感じる
- 9 (11) 同居している親が、自分の思うとおりにしてくれない、と感じる
- 10 (14) 落ちこんだ時などに、はげましてくれる相手が家族の中にはいない、と感じる

● III 役割行動の制約・負担

- 11 (3) やりたいことをやれる時間がへること
- 12 (6) 夫のかわりをすることで疲れを感じる
- 13 (9) 夫の赴任先に行ったり、夫の身のまわりの世話をすることで疲れること
- 14 (12) 友達づきあいなどの時間がへること
- 15 (15) 家庭内での自分の責任が重すぎる、と感じる

(註) 回答は、ほとんどない/少ない/どちらかといえば少ない/どちらかといえば多い/多い、の5件法による。( )内の数字は、実際の調査票上での配列順序を示す。

ち2点以上の項目の数を被調査者のとった対処戦略の数として用いた。

4-4. 夫の帰宅日数：単身赴任している夫がひと月平均どれくらい帰宅するのかを、①1日も帰らない、②1日程度一緒に過ごす、③2~3日程度、

④ 4～5 日程度, ⑤ 6～7 日程度, ⑥ 8～9 日程度, ⑦ それ以上, の 7 段階  
でたずねた。

## 5. 対処戦略についてのさらなる分析

上述の分析では, 妻が 36 種類の戦略を全体としてどれくらい頻繁に用いたのかと, どれくらいの種類の対処戦略を用いたのかという 2 つの指標を用いて対処戦略を扱っている。しかし, これだけでは対処戦略についてもっとも重要なメカニズムを理解することはできない。すなわち, いかなる対処戦略が家族や妻の適応にどのように関連するのかについての知見を得ることができない。

この問題を解決するために, 対処戦略についてはさらに以下のような分析を行なった。まず, 対処戦略の 36 項目を因子分析によっていくつかの下位カテゴリーに分類する。そして, それぞれの下位カテゴリーごとの合計得点を用いて被調査者についてのクラスター分析を行なった。この分析によって, いかなる対処戦略をどのようなパターンで用いるのかによって被調査者をいくつかのクラスターに分類することができる。そして, それらのクラスター間で価値観や適応状態の差を比較・検討した。また, 各クラスターごとに赴任期間の推移による諸変数の変化も検討した。

## 結果と考察

### 1. 変数の内的整合性の検討

本研究で扱う諸変数のうち, 項目得点の合計点を用いるものについて, その内的整合性を検討するため, それぞれについてクロンバックの  $\alpha$  係数を求めた。その結果を表 5 に示す。

### 2. GLM による分析の結果と考察

独立変数の効果について GLM によって分析を行なった。その結果得ら

表 5 諸変数の  $\alpha$  係数

変 数	$\alpha$
● 妻の価値観	
会社へのコミットメント	0.718
家族へのコミットメント	0.583
● 家族適応	
総 合	0.905
家 計	0.802
家 事	0.842
子供の養育・社会化	0.815
渉 外	0.674
緊張処理・統合	0.765
● 個人適応	
総 合	0.897
一般的欲求充足	0.765
関係的役割における欲求充足	0.719
役割行動の制約・負担	0.750
● 対処戦略	
	0.839

れた  $F$  値と有意水準とを表 6 に示す。

## 2-1. 現在の適応状態

### 2-1-1. 家族適応：

家族適応—総合について、会社へのコミットメントと家族へのコミットメントに有意な主効果が認められた。会社へのコミットメントの高い妻の方が、低い妻よりも家族の適応状態が良いと評価しており、家族へのコミットメントの低い妻の方が、高い妻よりも家族の適応状態が良いと評価していた。

さらに5つの下位カテゴリーすべてについて、会社へのコミットメントの有意な主効果がみられた。家計、家事、子供の養育・社会化、渉外、緊

表 6 一般線形モデルによる分析の結果 (数字は  $F$  値)

従属変数	独立変数					
	単身赴任期間 (A)	会社への コミットメント (B)	交互作用 (A×B)	単身赴任期間 (A)	家族への コミットメント (B)	交互作用 (A×B)
<b>● 家族適応</b>						
総合	0.65	14.01**	0.47	0.44	5.95*	0.22
家計	0.58	6.11*	1.23	0.47	4.99*	0.02
家事	0.21	7.84**	1.05	0.05	0.93	0.18
子どもの養育・社会化	0.66	15.93**	2.02	0.37	8.56**	0.49
渉外	0.58	4.78*	0.58	0.44	0.59	0.66
緊張処理・統合	0.32	9.32**	0.65	0.38	5.96*	0.56
<b>● 個人適応</b>						
総合	1.94	14.70**	2.06	2.61†	34.58**	0.41
一般的欲求充足	2.52†	10.19**	2.04	3.13*	28.84**	0.30
関係的役割による欲 求充足	1.97	19.48**	1.52	2.70†	29.30**	0.73
役割行動の制約・負担	1.59	8.11**	1.48	2.07	24.29**	0.14
<b>● 対処戦略</b>						
数	2.48†	3.91*	1.27	3.23*	18.43**	1.10
頻度	0.73	3.55†	0.66	1.31	26.30**	0.43
<b>● 夫の帰宅日数</b>						
	0.80	0.93	3.24*	0.95	0.60	2.66†

(註) 自由度は、赴任期間の主効果については (2, 144)、会社ならびに家族へのコミットメントの主効果については (1, 144)、交互作用については (2, 144) である。 †  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

緊張処理・統合のいずれのカテゴリーにおいても、会社へのコミットメントの高い群の方が、低い群よりも適応状態が良いと認知していた。一方、家族へのコミットメントの主効果は、家計、子供の養育・社会化、緊張処理・統合の3カテゴリーでのみ有意であった。これら3カテゴリーのいずれにおいても、家族へのコミットメントの低い群の妻の方が、適応状態がよいと認知していた。

赴任期間については、総合および5つの下位カテゴリーともに有意な主効果は認められず、赴任期間とコミットメントの交互作用はいずれも有意ではなかった。

2-2-2. 個人適応：

個人適応—総合について、会社へのコミットメントならびに家族へのコミットメントのそれぞれに有意な主効果が認められた。また、赴任期間と家族へのコミットメントの2つを独立変数とした一般線形モデルにおいて赴任期間に主効果のある傾向が認められた。赴任期間と家族へのコミットメントの効果について図1に示す。赴任期間の効果に関して、条件間の平均得点の差を検定したところ、M群とH群の間に有意 ( $t(95)=2.16, p<.05$ ) な差が認められた。L群とM群、L群とH群の間にはいずれも有意な差はなかった。

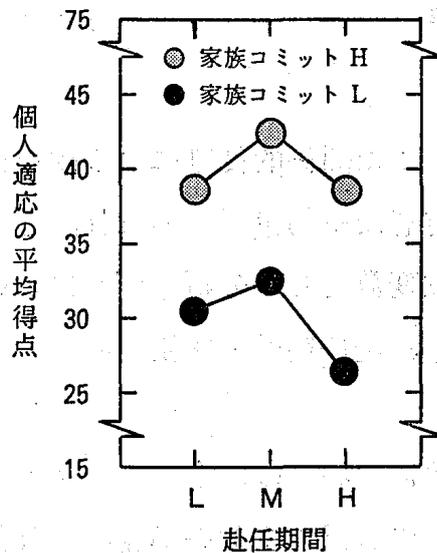


図 1 「個人適応」に及ぼす、「家族へのコミットメント」と「赴任期間」の効果

さらに個人適応の下位カテゴリーでは、一般的欲求充足について、赴任期間、会社へのコミットメント、家族へのコミットメントのいずれにおいても有意な主効果が認められた。赴任期間と会社へのコミットメントの効

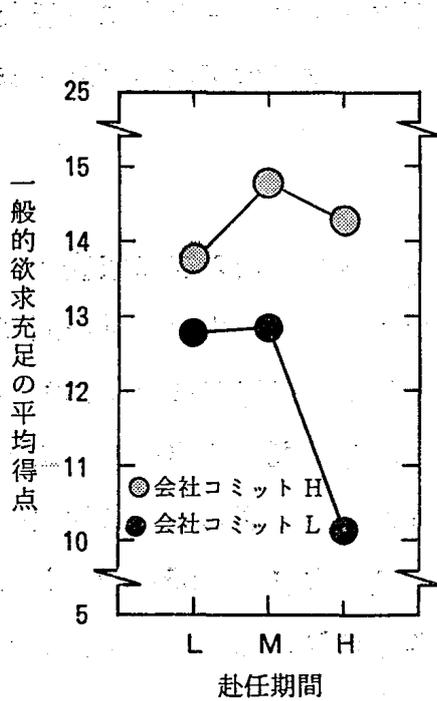


図2 「一般的欲求充足」に及ぼす、「会社へのコミットメント」と「赴任期間」の効果

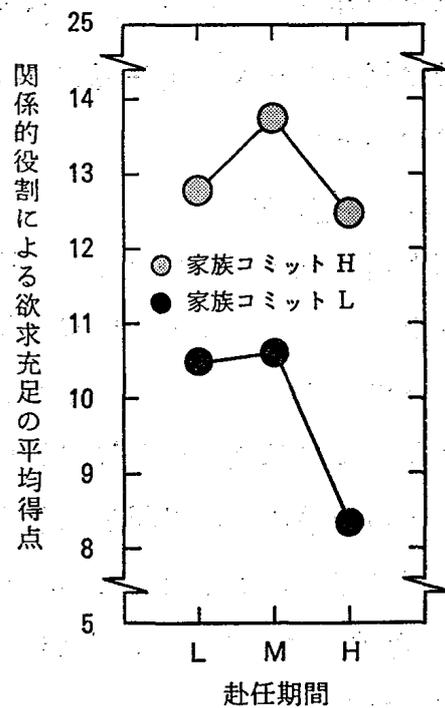


図3 「関係的役割による欲求充足」に及ぼす、「家族へのコミットメント」と「赴任期間」の効果

果について図2に示す。また関係的役割による欲求充足に関して、2つのコミットメントともに有意な主効果が認められ、赴任期間と家族へのコミットメントの2つを独立変数とした分析モデルにおいて赴任期間に主効果のある傾向が認められた。赴任期間と家族へのコミットメントの効果について図3に示す。

役割行動の制約・負担については、会社へのコミットメント、家族へのコミットメントそれぞれに有意な主効果が認められた。会社へのコミットメントが高いほど、そして家族へのコミットメントが低いほど、役割行動の制約・負担を感じる程度が低かった。

一般的欲求充足に関する赴任期間の主効果について条件間で平均得点の差を検討したところ、L群とH群の間 ( $t(99)=2.01, p<.05$ )、M群とH群の間 ( $t(95)=2.44, p<.05$ ) にそれぞれ有意な差が認められた。また関

系的役割行動による欲求充足についても、L群とM群の間 ( $t(99)=2.05$ ,  $p<.05$ ), M群とH群の間 ( $t(95)=2.23$ ,  $p<.05$ ) にそれぞれ有意な差が認められた。

以上のように、夫の単身赴任による家族システムの変化に対する適応の程度は、妻の価値観と高い関連を持つ。特に家族適応に対する妻の評価は、夫の赴任期間がどの程度であるかに関わらず、妻個人の価値観によって大きく規定されると推測される。これに対して妻個人の適応状態は、本人の価値観とともに夫の赴任期間とも高い関連をもつ。夫の赴任期間の長い群の方が、短い群あるいは中程度の群よりも個人適応の程度が高くなっている。

このような個人適応の過程にはいかなる要因が機能しているのだろうか。夫の赴任期間が長くなるにつれて、単に妻がその状況に慣れてしまっただけなのか、それとも適応のために何らかの積極的な対処戦略がとられたのだろうか。この点を明らかにするために、妻のとした対処戦略と夫の帰宅日数を取りあげ、妻の価値観や赴任期間との関連を分析した。

## 2-2. 対処戦略

### 2-2-1. 対処戦略の頻度：

36種類の対処戦略を全体としてどれくらい頻繁にとったのかについて、会社へのコミットメントに主効果のある傾向が認められ、家族へのコミットメントに有意な主効果が認められた。会社へのコミットメントが低いほど、そして家族へのコミットメントが高いほど、さまざまな対処戦略を頻繁にとっていた。

### 2-2-2. 対処戦略の数：

夫の単身赴任以後、妻のとってきた対処戦略の数について、会社へのコミットメントと家族へのコミットメントのそれぞれに有意な主効果が認められ、赴任期間の主効果もほぼ認められた。赴任期間と家族へのコミット

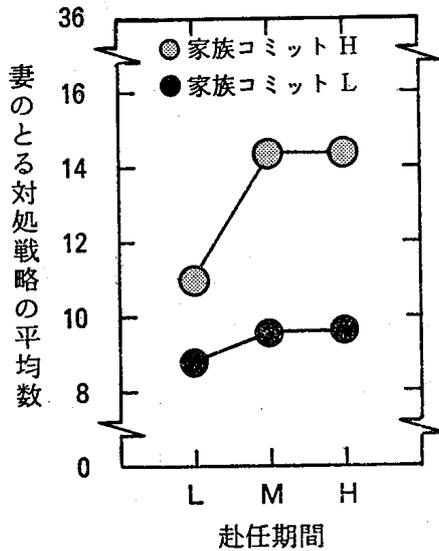


図4 「妻のとる対処戦略の数」に及ぼす、「家族へのコミットメント」と「赴任期間」の効果

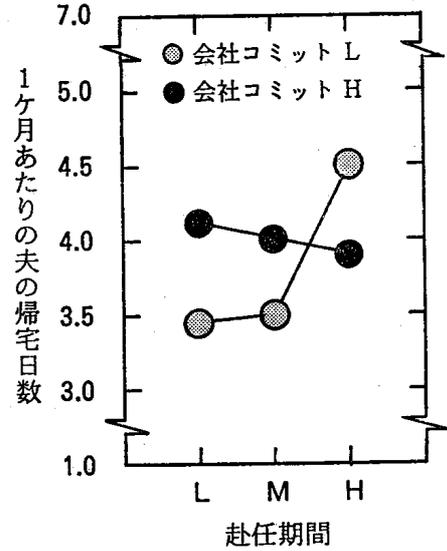


図5 「夫の帰宅日数」に及ぼす、「会社へのコミットメント」と「赴任期間」の効果

メントの効果について図4に示す。会社へのコミットメントの程度が低いほど、より多くの対処戦略をとっており、家族へのコミットメントの程度が高いほどより多くの対処戦略をとっていた。また、夫の赴任期間が短い群から中程度の群にかけて、妻のとる対処戦略の数が急増している。

## 2-2. 夫の帰宅日数

夫が月平均どの程度帰宅するかについては、赴任期間と会社へのコミットメントに有意な交互作用が認められた(図5)。また、赴任期間と家族へのコミットメントに交互作用のある傾向が認められた。

下位検定の結果、会社へのコミットメントの低い群で、赴任期間L群とH群 ( $t(49)=2.58, p<.05$ ), M群とH群 ( $t(41)=2.41, p<.05$ ) にそれぞれ有意差が認められ、家族へのコミットメントの高い群で、L群とH群に有意差 ( $t(57)=2.55, p<.05$ ), M群とH群に差のある傾向 ( $t(49)=1.85, p<.10$ ) がそれぞれ認められた。

妻のとった対処戦略と夫の帰宅日数についての以上の分析から、妻個人

の適応過程について次のように推測することができる。すなわち、妻は夫の単身赴任の期間が長くなるにつれて、適応のためにより多様な対処戦略を試みるようになる。夫はそれに応じて、帰宅日数を増やし、家族や妻と一緒に過ごす時間を多くとるようにする。そのことによって妻個人にかかる負担が軽減され、個人適応の程度が高まるのである。

### 3. 対処戦略についてのさらなる分析の結果と考察

#### 3-1. 因子分析の結果

対処戦略についての36項目のうち、極端に分散の低い6項目をのぞいた30項目の項目間相関行列から主成分分析を行い、さらにバリマックス回転をほどこすことによって表7に示すような因子負荷行列を得た。第1因子は家族以外の人びとから得た「ソーシャル・サポート」、第2因子は家族内の「役割構造の修正・変更」、第3因子は、「欲求水準の下方修正」、第4因子は「フラストレーションの発散」、第5因子は「欲求の転移」、第6因子は「感情の表出」、をそれぞれ示すものと解釈された。

#### 3-2. クラスター分析の結果

上述の因子分析の結果得られた各因子ごとの項目得点の合計点を用いて、ワード法によるクラスター分析を行なったところ、被調査者を3群のクラスターに分類することができた。

それぞれのクラスターの特徴を把握するため、各因子を構成する項目の合計得点についてクラスターごとの平均値を求めた。その結果を図6に示す。GLMによって平均値の差の検定を行なったところ、第1因子については  $F(2,141)=21.02$ 、第2因子については  $F(2,141)=55.13$ 、第3因子については  $F(2,141)=23.58$ 、第4因子については  $F(2,141)=21.96$ 、第5因子については  $F(2,141)=129.61$ 、第6因子については  $F(2,141)=5.05$  となり、いずれも1%水準で有意であった。

表 7 対処戦略項目についての因子分析の結果 (バリマックス回転後の因子負荷行列)

項 目	因 子 番 号					
	1	2	3	4	5	6
第 1 因子						
・ 親しい友人に, 手助けや助言を求めた.....	0.844	0.041	0.029	0.091	0.126	0.099
・ 話やグチを人にきいてもらったりした.....	0.707	0.089	0.021	0.229	0.110	0.997
・ 近所の人に, 助言や手助けを求めた.....	0.632	0.177	0.199	-0.073	-0.050	-0.040
・ 親戚の人に, 助言や援助を求めた.....	0.402	0.167	-0.011	0.275	-0.050	-0.018
・ 家族ぐるみで引越しをして, 夫と同居することを検討した.....	0.295	0.108	-0.137	0.212	-0.034	-0.032
第 2 因子						
・ 子供にも家事(かたづけやそらじなど)を手伝わせるようにした.....	0.144	0.707	0.006	0.137	0.124	0.212
・ 自分が家族をまとめ, 長として家を代表するようにした.....	0.136	0.613	0.211	-0.146	0.164	0.069
第 3 因子						
・ 家族のみんなで話し合って, 自分のことはなるべく自分で するようにとりきめた.....	0.017	0.560	0.032	0.124	0.202	0.254
・ 子供に対して父親のかわりもつとめた.....	0.200	0.520	0.077	0.166	0.136	0.064
・ 夫の今ままでしていたことを, 家族で分担するようにした.....	0.113	0.506	0.104	0.056	0.153	-0.068
・ 家計の補助のために, 新たに自分も働きだした.....	0.029	0.363	0.017	0.123	-0.099	-0.047
第 4 因子						
・ 「今まで自分ほぐまれすぎでいたのだ」と自分に言いかけた.....	0.021	0.096	0.775	0.006	-0.006	0.313
・ 「他の人たちにくらべれば, 自分はほぐまれてるのだ」と 言いかけた.....	0.025	0.074	0.653	0.115	0.189	-0.008
・ 心の中で神や仏に頼ったり, 祈ったりした.....	0.144	0.294	0.389	0.104	0.077	0.373

第 4 因子	・夫に不平・不満をぶつけた……………	0.231	0.025	-0.001	0.682	0.031	0.107
	・単身赴任をやめるように夫に頼んだ……………	0.066	0.113	0.159	0.504	-0.052	0.020
	・「自分の望みが高すぎるのだ」と思うようにした……………	-0.029	0.036	0.446	0.480	0.156	-0.015
	・「夫が単身赴任をしているような状況では不満なことが多い のもしかたがない」とあきらめた……………	0.188	0.140	0.367	0.446	0.206	-0.005
	・お酒などを飲んで気分をまぎらわした……………	0.050	0.133	-0.054	0.434	0.101	0.235
	・「なかなか自分の思い通りにはならないものだ」とあきらめた……………	0.226	0.087	0.202	0.385	0.274	0.278
第 5 因子	・サークルやPTA, 地域活動, 政治活動などに参加した……………	-0.058	0.042	-0.053	0.047	0.612	0.084
	・趣味にうちこんだり, 新しい趣味をはじめたりした……………	0.041	0.188	0.208	0.041	0.604	-0.008
	・友人とのつきあいを深めたり, 新たに友人を作ったりした……………	0.406	0.177	0.128	-0.023	0.482	0.144
	・「今の生活でも満足できる」と思うようにした……………	-0.013	0.171	0.278	0.035	0.398	0.113
	・単身赴任についての経験談, 手記などを読んで参考にした……………	0.160	0.013	0.246	0.116	0.327	0.096
	・なにかの資格をとったり, 新しい技術を身につけたりした……………	-0.002	0.243	-0.079	0.020	0.246	-0.073
第 6 因子	・自分の気持ちや日記をつづったり, 文章に表現したりした……………	0.048	0.013	-0.102	-0.060	0.145	0.589
	・子供のことや没頭するようになった……………	-0.091	0.164	0.093	0.264	0.078	0.498
	・泣いて気をはらした……………	0.037	-0.049	0.144	0.034	-0.013	0.466
	・宗教活動に参加した……………	0.049	0.086	0.241	0.186	-0.027	0.352

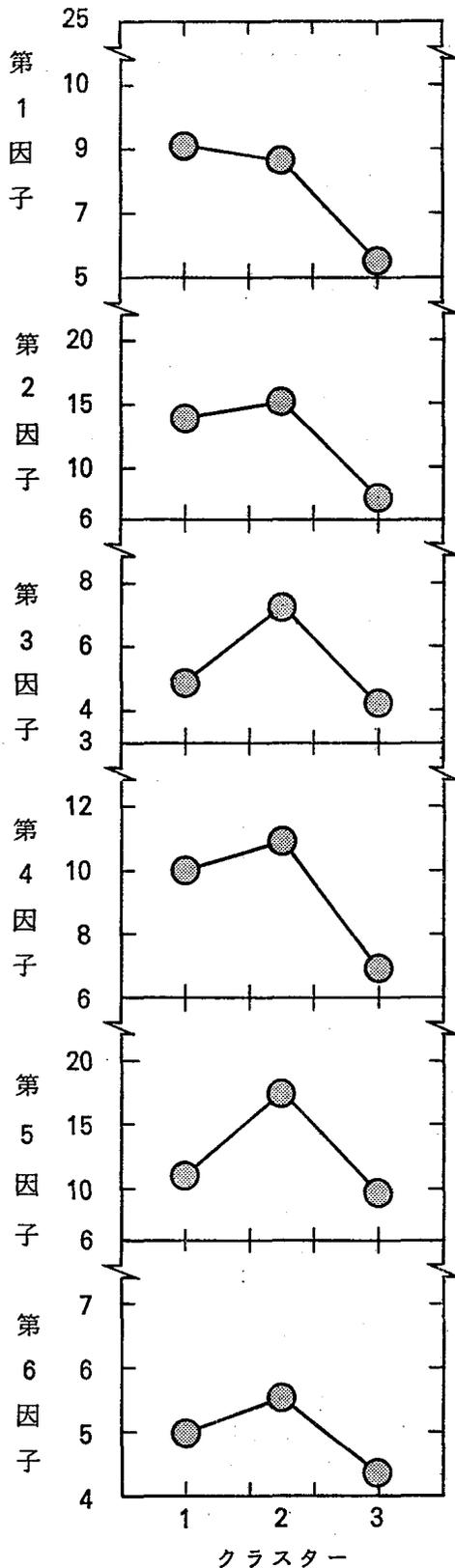


図 6 対処戦略についての各クラスターの因子別合計得点の平均

### 3-3. 各クラスターの特徴

上記の3つのクラスターに分類される妻の価値観, 適応状態, 夫の帰宅日数等がいかなる特徴をもつかを探るため, クラスターと夫の単身赴任期間を要因としてGLMによって分析した. その結果を表8と, 図6, 図7, 図8に示す. それぞれのクラスターの特徴は以下のとおりである.

#### 3-3-1. 第1クラスター:

このクラスターに分類される妻たちは, 第1因子, 第2因子, 第4因子に表現されるような対処戦略を頻繁にとっている(図6). すなわち, 家族あるいは自分の適応のために家族外からの援助を積極的に求め, 家族の役割構造を修正・変更するとともに, ときには自己のフラストレーションを爆発させることもある. 価値観としては, 会社に対しても家族に対しても同じ程度の価値を認めている(図7). 適応状態については, 家族適応への評価, 個人適応ともに赴任期間短期から中期にかけていったん低下するが, 赴任期間が長くなると再び適応状態が良くなるという傾向を示している(図8).

このような対処戦略と価値観ならび

表 8 対処戦略についてのクラスターと他の諸変数との関連 (数字は  $F$  値)

変 数	クラスター (A)	単身赴任 期間(B)	交互作用 (A×B)
<b>● 妻の価値観</b>			
会社へのコミットメント	2.75†	4.39*	0.50
家族へのコミットメント	10.01**	2.62†	0.46
<b>● 家族適応</b>			
総合	6.49**	0.43	2.29†
家計	3.84*	0.26	0.94
家事	3.29*	0.05	0.87
子供の養育・社会化	5.21**	0.21	1.88
渉外	3.79*	0.49	1.99†
緊張処理・統合	5.29**	0.60	2.00†
<b>● 個人適応</b>			
総合	21.97**	4.27*	1.58
一般的欲求充足	14.86**	5.07**	1.75
関係的役割による欲求充足	20.43**	5.12**	2.39†
役割行動の制約・負担	17.30**	1.87	0.85
<b>● 夫の帰宅日数</b>			
	4.11*	1.36	0.11
<b>● 単身赴任への評価</b>			
総合	2.39†	2.05	1.85
家族帯同赴任よりもずっと“正解”	5.11**	3.18*	1.86
人間形成にとってプラス	1.30	0.62	0.86
夫婦関係の再確認上プラス	0.09	0.59	3.04*

(註) 自由度は、クラスターの主効果ならびに単身赴任期間の主効果については (2, 141), 交互作用については (4, 141) である。

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

に適応の関連性についてはつぎのように推測することができよう。この群の妻たちのように、会社に対しても家族に対しても同じ程度の価値を認めている人びとがそれら双方に対する価値を維持しようとするなら、何らか

単身赴任家族の危機適応過程

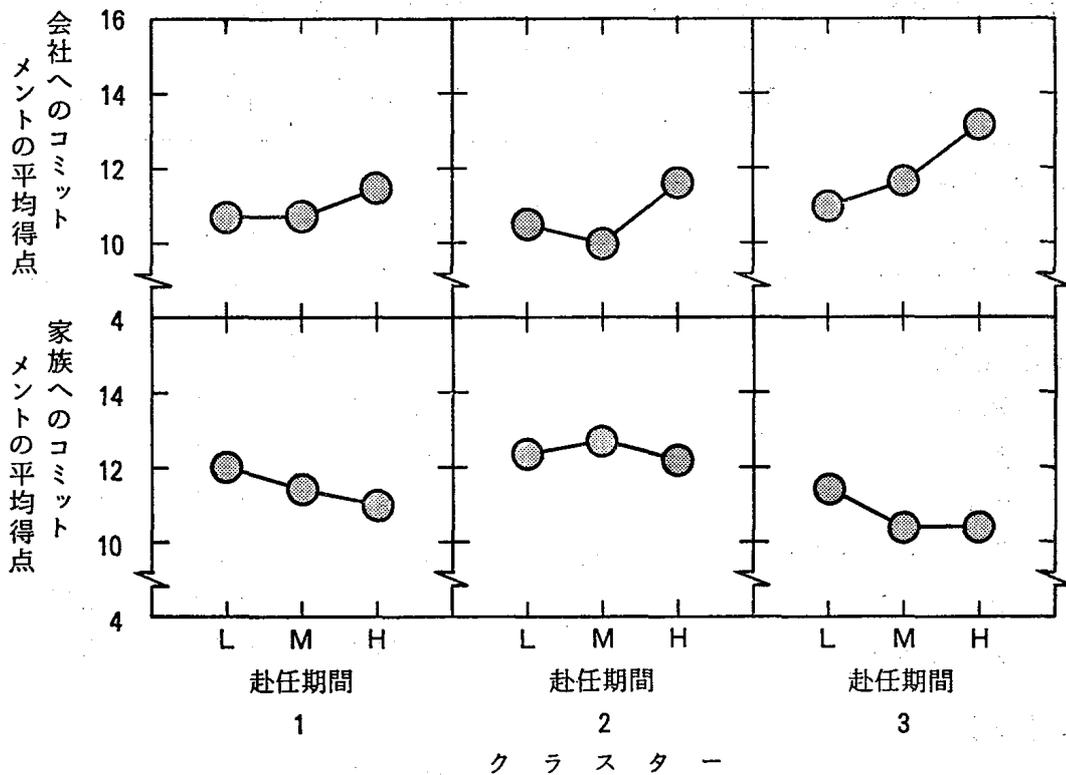


図7 「妻の価値観」と「対処戦略クラスター」ならびに「夫の赴任期間」の関連

の効果的な対処戦略をとることによって家族や自分自身の適応を確実なものにするしかない。なぜならば、もし家族適応に失敗したなら、会社に対して認めていた高い価値を低下させざるを得ないからである。それを避けるために、彼女たちは社会的な支援を求めたり家族内の役割構造を変化させることによって家族適応を図り、同時に自らのフラストレーションは率直に発散させることによって個人適応を図るのである。それ以外の対処戦略、すなわち欲求水準の下方修正、欲求の転移ならびに感情表出は、いずれもいわば困難な状況からの逃避であり問題の直接的な解決にはつながらない。第1クラスターの妻たちは、このような逃避的な対処戦略ではなくより実質的な対処戦略をとることによって、適応を確実なものにするのと同時に会社に対して抱いていた価値観も維持することができたと考えることができよう。

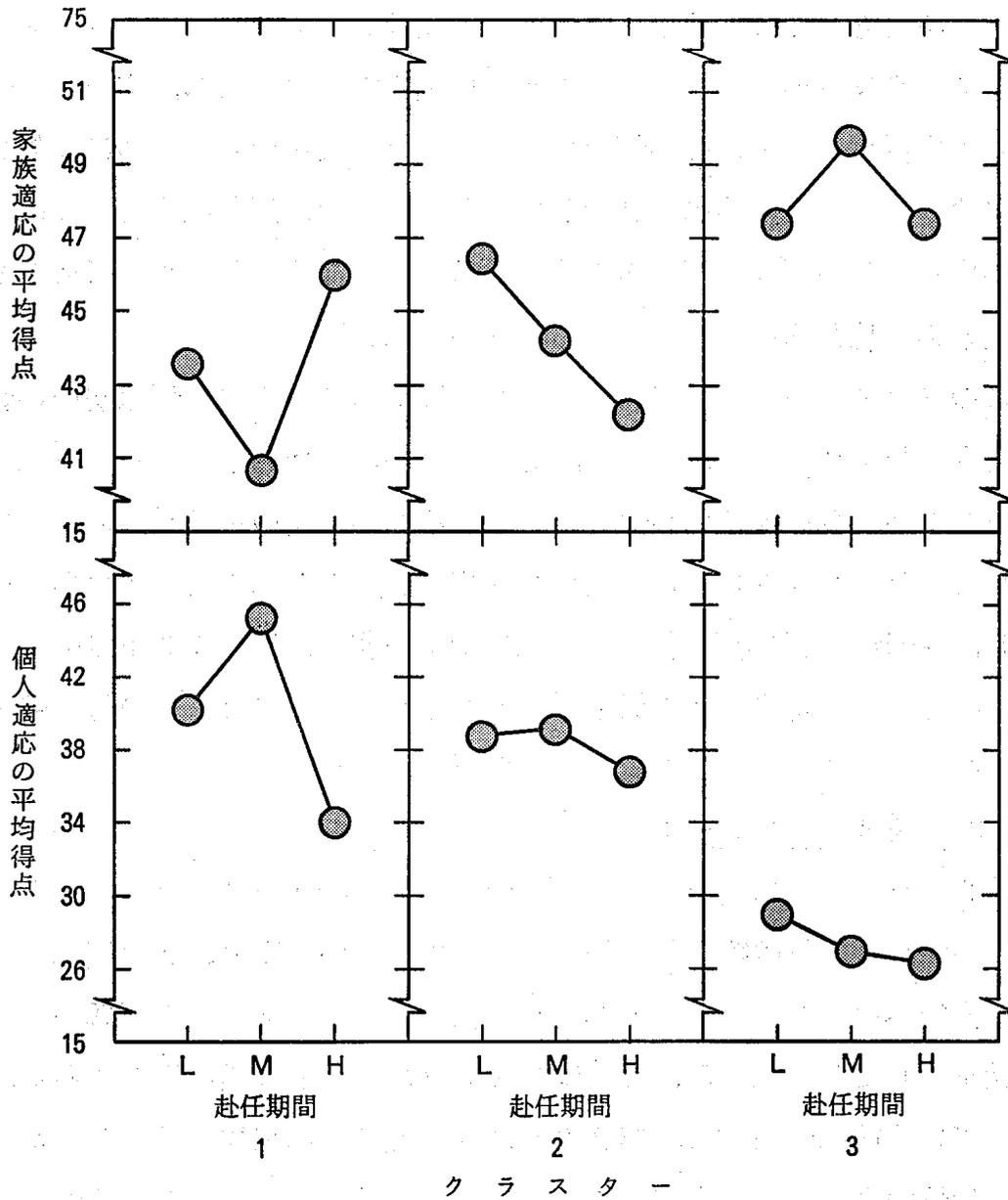


図 8 「適応状態」と「対処戦略クラスター」ならびに「夫の赴任期間」の関連

3-3-2. 第 2 クラスター：

このクラスターに分類される妻たちは、第 1 因子から第 6 因子に至るまでのすべての対処戦略を非常に積極的に試みている (図 6)。すなわち、第 1 クラスターの妻たちとは異なり、欲求水準の下方修正、欲求の転移、感情表出といった直接的には適応につながらないような対処戦略もとって

る。価値観としては、他のクラスターと比較して会社へのコミットメントが低く、家族へのコミットメントが高い(図7)。すなわち、家族が一体となって生活することに高い価値をおいており、夫が会社のために家族を犠牲にすることを積極的には評価していない。また、適応状態としては、家族適応が、赴任期間短期から中期、長期と長くなるにしたがって低下し、個人適応は比較的低い水準で安定している(図8)。

このクラスターに分類される妻たちの特徴については、価値観の影響の大きさを指摘することができるかもしれない。すなわち、彼女たちは家族に対してあまりに大きい価値をおいているために夫の単身赴任によって引き起こされた家族システムの変化を家族にとっての危機的状況であると認識し、それゆえに家族適応への評価も個人適応もともに低下させてしまう。そしてこの適応状態の低さが、ときとして不必要なほどの対処戦略をとらせることにつながると考えることができよう。

### 3-3-3. 第3クラスター：

第3クラスターに分類される妻たちは、上記の第2クラスターとは逆に、いずれの対処戦略も積極的にはとっていない(図6)。価値観についても、会社へのコミットメントが高く家族へのコミットメントが低いという特徴を示しており(図7)、これは第2クラスターとは逆のものである。さらに適応状態についても、第2クラスターとは逆に家族適応、個人適応ともに比較的高い水準で安定しているという特徴を示している(図8)。

彼女たちのこのような特徴についても、第2クラスターとまったく逆の傾向を読み取ることができる。つまり、第3クラスターの妻たちは会社に対して高い価値をおいているがために、夫の単身赴任にともなう家族システムの変化をそれほど深刻なものとは捉えず、また個人適応の水準もそれほど低下しない。そのため、何らかの対処戦略をとることに対してはそれほど強く動機づけられることはないと考えられることができよう。

ところで、対処戦略の分析結果についての以上の考察については、アド・ホックなものであるとの批判があるかもしれない。それは、第1クラスターの特徴についての考察においては、妻の価値観が対処戦略を規定し、ついでその対処戦略が適応の程度を規定すると考えているのに対して、第2、第3クラスターの特徴についての考察においては、価値観が適応の程度を規定し、それが対処戦略を規定すると解釈している点についてである。つまり、因果関係について2つの異なった流れを仮定している。

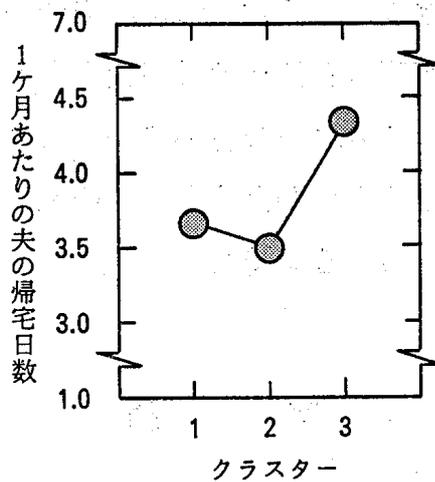


図 9 「夫の帰宅日数」と「対処戦略クラスター」の関連

今回の調査は遡及的な方法をとっているため、このような2つの異なった因果の流れを仮定することがどの程度妥当であるかについて明確な解答を出すことはできない。しかし、少なくとも第2、第3クラスターの妻たちの特徴については、図9に示す対処戦略クラスターと夫の帰宅日数との関連についての結果が新たな示唆を提供しているようである。図9から明らかのように、第3クラスターの妻たち、すなわちどの対処戦略も積極的にとっていない妻たちの夫の帰宅日数が他の2つのクラスターよりも多い。この結果から、夫の帰宅日数が妻の価値観に大きな影響を及ぼしている可能性がうかがえる。すなわち、第2クラスターの妻たちは、夫の帰宅

日数が少ないがゆえに家族が一体となって生活することの重要性をより強く認識するようになる。そして、その認識が家族適応への評価や個人適応を規定し妻たちを多様な対処戦略をとるよう動機づけるのである。これに対して、第3クラスターの妻たちは、夫の帰宅日数が多いため、家族が一体となって生活することの重要性をそれほど強く認識することもない。したがって家族適応や個人適応が低くなることもなく、対処戦略を積極的にとる必要性も低くなるのである。

しかし、このような考察ではなお第1クラスターの妻たちの特徴を的確に説明することができない。彼女たちは、夫の帰宅日数が少ないにもかかわらず、家族への価値観も会社への価値観もともに中程度に維持することができている。このクラスターの特徴については、今回分析した変数以外の変数の影響を考慮する必要があるだろう。この点についての分析と考察については別の機会にゆずらざるを得ない。

## 要 約

以上に述べてきた結果ならびに考察は、大略つぎの5点にまとめることができよう。

- (1) 夫の単身赴任による家族システムの変化に対する適応の程度は、妻の価値観と高い関連を持つ。
- (2) 特に家族適応に対する妻の評価は、夫の赴任期間がどの程度であるかに関わらず、妻個人の価値観によって大きく規定される。
- (3) 妻個人の適応状態は本人の価値観とともに夫の赴任期間とも高い関連をもつ。夫の赴任期間の長い群の方が、短い群あるいは中程度の群よ

りも個人適応の程度が高くなっている。

(4) 夫の赴任期間が長い群で個人適応の程度が高くなるのは、妻のとった対処戦略が効果を及ぼしたと同時に、夫の帰宅日数が増加したことによって妻の負担が低減されていたことにもよる。

(5) 妻の価値観、適応状態と対処戦略の関係は一義的に決まるものではない。まず価値観が対処戦略を規定し、ついでその対処戦略が適応状態を規定するという関係性と、価値観が適応状態を規定し、つぎに適応状態が対処戦略を規定するという関係性の2つを想定することができる。

以上の結果と考察は、遡及的な方法を用いて得られた調査データのうち、限られた変数間の関連のみを分析することによって導き出されたものである。したがってあくまでも仮説の域を出るものではない。今後、次のような諸変数を分析していくことによって、単身赴任家族の危機適応過程をより明確に理解することができよう。

まず、問題のところで蝕れたように、状況的変数として家族システムの特性と社会的環境の特性とを分析する必要がある。今回の分析では、妻の個体的特性として価値観の効果を検討した。そして、適応状態や対処戦略に対してその価値観がきわめて大きな影響を及ぼすことが示唆され、その影響のメカニズムについてはかなり複雑な因果関係が想定された。この妻の個体的特性である価値観の効果に加えて、家族システムの特性と社会的環境の特性の効果を検討することによって、個体(妻個人)―集団(家族)―社会の3つのシステムがいかに関連し合いながら家族や妻個人の適応を規定するのかをより明解な形で理解することができよう。

また、人口統計学的な変数と適応過程との関連についても検討する必要

がある。今回の分析結果からは、適応過程についての心理的な過程をある程度理解することは可能であるが、ここで得た知見を実際の単身赴任家族の危機適応に応用するためには、心理的過程と人口統計学的な変数との対応関係を明確にしておく必要がある。

さらに、単身赴任の状況そのものについてもより精しく検討する必要がある。今回の分析では、家族の危機適応過程として「単身赴任→対処戦略→適応」という過程を想定し、この過程に介在する諸変数の効果を検討した。しかし、夫の単身赴任が直ちに何らかの対処を必要とするほどの危機的状況をもたらすとはかぎらない。むしろ、夫の単身赴任によって家族システムが変化し、その状況において他の何らかの出来事が生じた場合にはじめて家族にとっての危機的状況が生じ、それに適応するための対処戦略がとられるものと考えらるべきであろう（稲葉ほか、1986）。したがって、対処戦略の効果を正確に理解するためには、夫の赴任期間中にいかなる出来事が生じ、それに対してどのような対処戦略がとられることによっていかなる効果が生じたのかというより具体的な過程を分析することが必要である。

今回の調査で得たデータからは以上のような分析が可能であろう。しかし、それでも遡及的な方法を用いたことによる限界は克服されない。したがって、厳密な意味での因果関係については明確な結論を出すことはできない。また、単身赴任をしている夫の側の心理的過程や行動について明らかにならないかぎり、単身赴任家族の危機適応の全体的過程を理解することはできない。今後は、因果関係を正確にとらえることができ、また夫の側の心理的過程や行動も同時に分析することができるような方法を用いることによって、単身赴任家族の危機適応についての力動的かつ全体的な過程を明らかにしていく必要がある。

引用文献

- 稲葉昭英・高橋潔・小林和久・浦 光博・高根定信・南 隆男 (1986) 家族ストレス論による単身赴任家族研究の試み—夫の単身赴任によって、残された家族員、とくに妻は、いかなる困難に直面し、いかなる対処行動をとって、その困難を克服しているのか—。哲学, 83, 251-286.
- 南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 (1986) 単身赴任家族の危機適応過程—「赴任期間」と「妻の価値観」に着目して (1)—。産業・組織心理学会第 3 回大会研究発表論文集 pp. 50-51.
- 南 隆男・久谷與四郎・越河六郎・奥井禮喜・稲葉昭英 (1986) いわゆる「単身赴任」とは何か—問題の所在をめぐって—。産業・組織心理学会第 2 回大会研究発表論文集, pp. 47-51.
- 浦 光博・稲葉昭英・南 隆男 (1987) 単身赴任家族の危機適応過程—「赴任期間」と「妻の価値観」に着目して (2)—。産業・組織心理学会第 3 回大会研究発表論文集 pp. 52-53.